

光ピックアップ市場が再び拡大のペースを速めている。光ピックアップとは、CDやDVDなどに半導体レーザーを照射し、データを読み書きする電子部品のことで、AV機器やパソコン周辺機器の基幹部品となっている。その生産台数の推移をみると、2000年末から2002年前半に掛けて踊り場にあったが、同年後半以降は、前年比5%程度のピッチで拡大を続けている(図)。

この背景には、DVDにデータを書き込める記録装置の需要が急増し始めたことがある。主力のパソコン用で、CDの約10倍の大容量データを保存可能という利点を梃子に、パソコンへの搭載比率が急速に高まったうえ、パソコンの需要自体も回復に転じた、AV機器用でも、録画機能を備えたDVDレコーダーが、高画質かつ頭出しが容易というメリットを武器に既存のVTRを急速に代替し始めた、といったことが光ピックアップの市場の拡大につながったわけだ。

光ピックアップ市場は、こうしたDVD用記録装置の生産拡大に加え、さらに記憶容量が大きい次世代光ディスク用記録装置の量産開始も見込めるため、引き続き拡大基調を辿ろうが、メーカー各社において受注獲得のハードルは格段に高まる。

まず、技術難度が大幅に上昇する。DVD用記録装置向けの場合、データ書き込速度を高速化するには、ディスクにデータを焼き付ける時間を短縮するために、高出力の専用レーザーや光の透過性が高いレンズを

開発する必要がある。さらに、次世代光ディスク用記録装置向けでは、高機能化に伴い、半導体やレンズなど関連部品が増えるなか、ユーザーからの小型・薄型化、低価格化要請に対応するために、設計の工夫による部品点数の削減が求められる。

光ピックアップのユーザーも、納入メーカーを選別する姿勢を強めそうだ。最近、パソコン周辺機器分野では、基本特許を有するわが国・欧州ユーザーと、韓国・台湾ユーザーが相次いで統合している。その際、ユーザーは、調達ロットを纏めることで大幅な割引を引き出すために、光ピックアップの納入メーカーを絞り込むケースが増えている模様である。今後は、AV機器分野でも、アジア勢の勢力拡大とわが国・欧州ユーザーとの事業提携が予想されるとあって、値下げ対応が遅れたメーカーは、他社に受注を奪われる懸念が大きい。

この先、当業界では優勝劣敗が鮮明化し、寡占化が一段と進む可能性が高そうだ。

(7.23 森尾 正彦)

図：光ピックアップの世界生産台数の推移

